

B-75 植物染料および合成染料染色布の比較研究 (あかねについて)
姫路短大 ○土井千鶴子

目的 一般に植物染料で染めた染色布の色調は、優雅であるとか、使えば使う程味が出てくるとも言われており、現在もなお一部で用いられている。しかし、これらに関する研究は、今日まであまり見あたらないので、我々は植物染料と合成染料染色布の色調の違いや主な染色堅牢度などを比較するために、本実験を行なった。本報では、古くから赤色系の天然染料として、衣服の染色に用いられてきた西洋茜とその主成分である合成のアリザリンによって絹を染色し、堅牢度試験の後に、測色を行ない、両染料による染色布の色調を比較検討した。

方法 試験布は白の絹羽二重で、常法により糊ぬきを行ない、西洋茜と媒染染料のアリザリンレッドSを用いて染色を行なった。いずれの染料も、まず4種の媒染液(明ばん、重クロム酸カリ、硫酸銅、硫酸オーフェル)に試験布を常温で30分間浸漬し、軽く水洗後、それそれに調整された染浴に入れ、80°Cで30分間染色した。染色後、自記分光光度計を用い、染色布の分光反射率曲線、主波長、純度及び明度を求めた。更に、100名の被検者に染色布のイメージ調査を行なった。染色堅牢度試験の後、再びこれらの値を測定し、比較検討した。

結果 西洋茜による染色布の色相は、いずれの媒染剤についても、主波長の範囲は、およそ593~597mμの間で、茶系統である。一方、アリザリンレッドSでは、媒染剤の種類によって主波長が490mμ付近と600mμ付近にわかれる。染色布のイメージ調査では、西洋茜の方が、薄い、莊重な、古典的な、暗い、落ちついたなどの項目に差が認められた。染色堅牢度については、染料の種類、媒染剤の種類によって幾分差がみられた。